

小田実全集（小説 第9巻）

ガ島

講談社

小田実全集

Makoto Oda



目次

この書きものの蛇足としてのまえせつ

が 島

文庫版へのあとがき



## この書きものの蛇足としてのまえせつ

こういう書きものを何という名前と呼んだらよいか。コッケイ小説。マジメ小説。あるいは、戦争小説。平和小説。旅行小説。冒険小説。何だつてよろしいが、小説というより、この小説、書きものというところを使つたほうがもつと適切なような気がするが、作者の私にあえて言わせてもらえば、政治小説である。あるいは、もうひとつ言つて、ポレミック小説。

当今、どうやら、そういう小説ははやらないらしい。誰もが、革命派を自称・他称する小説家まで、文学小説家の顔をしたがる。それは人それぞれの好きずきであつてとやかく言うこともないが、なんだか、それではさびしすぎる。せつかくの文学の広大な領域、小説というなんでも入るバスケットの中が狭くなつて、面白くない。小説の対象のはずのかんじんの人間の中まで狭くなつて、みんな、何やら、蒼ざめて見える。それで、政治小説である。カート・ボネガットというアメリカ合衆国の小説家、最近の「プレイボーイ」のインタビュウのなかで、自分の書きものの動機は、すべて、政治的なものであると言つていた。私も彼にならつて、この小説、いや、書きもの、きわめて政治的なものだと言つておきたい。私の同輩にはボネガットがいて、先輩には、東海散士という政治書きもの家もある。

一九七三年九月

小田 実



ガ  
島

なにしろ、かわいいことが昔から大きらいな男なのである。それで、ヒコーキなんか乗ったことがない。自慢じゃないが、ほんとうの話だ。あんなものが、そもそも、飛ぶはずがあるものか。昔の、プロペラをたよりなげにまわしてやつとこさ飛んでいた「赤トンボ」あたりの練習機ならいざ知らず、今の世の中、そんな悠長なことではラチがあかぬ。ピカピカ光る巨大な翼にエンジンをいくつもぶら下げて、ゴウツーとかウウツーとか首狩り族の雄たけびそこのけのドー猛な叫びをあげながら、デパートほどもあるジェット機が中天めがけて一直線に駆け昇る。言わずと知れたジャンボというやつだが、わたしの見るところ、あんなものが実際に飛ぶはずはないのである。あれはただあんなふうに見えるだけのことで、わたしのような下界の見物人も、なかの団体旅行も、夢を見ているのである。老若男女、そろいもそろって夢を見ていて、それで、飛ぶ。飛ぶように見える。

ただ、あいにく、わたし、夢を見るようなヒマ人の人生は送っていない。目下のところ、途方もなく忙しいのである。バカバカしい額だかのお金を払って、夢を見ているひまはない。まずもって、わたしの店、これははやっている。はやりにはやっている。最初に始めたのはアンミツ屋であった。郊外の女子高校のすぐわきに手ごろな店舗を見つけて開いた。これはあたった。女の子は甘いものが好きで、ことにアンミツとなると眼がない。五年そこでごんばって、今でもその店は人に頼んでつづけて



いるが、市内に進出してアベノ橋にトンカツ屋を開いたのが、事業の第二段階であった。しばらくして、となりのパチンコ屋も買って店をひろげ、パチンコ屋を買ったおかげかどうか、あたりがつづいて、今ではキタとミナミのかなりいい場所に一店ずつもって、アベノ橋のすまい兼用の本店をあわせると、三店のチェーンである。「トンカツの西川」というと、テレビのスポットのコマーシャルでおなじみの「うまいで、安いで、ワッハッハッ」の店ということになっていて、このあいだなんか、新聞の人が、おたくの薄利多売の秘訣は、と訊きにきた。写真もとられたが、わるいことに、市内で大きな火事が起つて、そちらの記事に押し出されてわたしの店の記事は出ずじまいであった。十部ほど買って来いとボンにその日の夕刊を買いに走らせたのだが、何にも出ていなかった。お父ちゃん、何で出エへんのやろ、忙しいお父ちゃんの時間つぶしよって、これ、サギみたいなもんですわ。どこからそんなセリフをおぼえて来たのか、ボンはませた口をきき、わたしは駄賃に百円にぎらせた。

「うまいで、安いで、ワッハッハッ」のスポットの文句もわたしが考えたのである。代理店にたのむと、バカくさい値段を言ったので、そんなら自分でつくりまっさとその場で考え出した。スポットの文句は漫才師のトロ八が言つて、トンカツの大きいところをがぶりとひと口。トロ八をミナミの寄席で見つけて来たのはキタの店のマスターの田口である。トロ八はトロ七と二人で漫才をやっているのだが、たいしてうまくない。ただ、口がいかにも大きい。それに、安かつたのである。代理店の男もテレビのお人もトロ八なんていう名前はきいたことがないと言っていたから、ギャラはめっぼう安かつた。「うまいで、安いで、ワッハッハッ」はあつた。今でもあつている。ボンの学校でも、みんなが何かと言うと「うまいで、安いで、ワッハッハッ」を言い出すので、先生が困っているという話であ

る。このあいだ、父兄会で子供が真似をして困る、やめさせてほしいと申し入れた父兄がいて、トミ子は困ったそうだ。先生はさすがに笑ってとりあわなかつたそうだが、申し入れた父兄も、もちろんわたしのところが震源地であることを知っているのである。知っていて、イヤ味を言ったにちがいない。おかげで、トミ子は父兄会から帰って来たあとひと晩機嫌がわるかつたが、ああいうのは、わたしの仕事のさしさわりになって困る。おしまいにはあんなコマージュシャルやめはりなはれなとまで言い出したのだが、あとできくと、申し入れをした父兄というのは電気屋の戸塚の細君で、女というものはまったく見さかいない。あそこから仕入れたカラー・テレビの故障のことで、一度、ねちっこく油をしぼってやったことがあった。油をしぼったあげく、一万円返させてやった。薄利多売が身上のわたしのことだ、勘定はまちがいなくしておきたいのである。それが商売というものだ。

女は見さかいないと思うのは、このごろ、トミ子までが車を買えと言いだしたことだ。今日、誰だつて、車の一台ぐらいいもつていてというのである。トミ子は、親類の誰かれ、近所の誰かれの例をあげた。なかには、子供に一台あて車を買ってやったというアホウまでいる。レストラン「藤木」の主人である。子供が三人いて、上二人は男、いちばん下が女の子だが、「藤木」のオヤジ、今年二十になつたばかりだという大学生の女の子にまで車を買ってやった。妾のほうにつくらせた子供二人のほうにはどないしたんやろ、やつぱし、平等に車買うてやりよつたんやろかとわたしは言ったが、そんなことうち知りませんで、知るはずがあるもんですかとトミ子はこわい声を出した。トミ子には奇妙に尼さんめいたところがあつて（そう言えば、昔、尼さんにあこがれたそうである。頭まるめようと思うたこと、ほんまにありますねんで。いつか、夫婦ゲンカのあとで、そうおどかすように言った）、

たとえアカの他人のことであっても、浮気の話や妾ウンヌンとなると、露骨に不機嫌になる。そのうち、そのウンヌンがわたしのことであるかのようににらみつけ始めるので、わたしは途中でやめてしまう。そのときもやめてしまったが、おかげで車の話も途中でおしまいになった。

車の話の次は旅行の話だ、おきまりのことだがどこかへ連れて行けという。わるいことに、最近、商店会で旅行の世話をするようになった。おかげで、みなさんむやみやたらとお出かけになる。それはじめのうちは「スズランと夢の北海道一周」やら「ふるさとの憩いの九州温泉めぐり」だったのが、いつのまにか、行先が香港になり、ソウルになり、グアムになった。いや、パリ、ロンドン、ローマというのまで立ち現われる世の中である。香港で、すばらしいパンマにありついたらという人がいたからだじゅうをなめまわしてくれて、おかげでもう言うことをきかないとあきらめていたものまでみごとに動かしてくれた。そういう幸運にありついたらのは「すし善」の畑さんであるが、そのお助け婆さんみたいな女を探して歩いて、結局、見つからずじまいだったと歎くのは喫茶店「ハッピー」のマスターの堺だが、彼は、まだまだ、そんな年ではないのである。なめまわしてなんかもらわなくてもけっこうやって行けるのだ。男がパンマなら、女は香港では買物だとはぎまわっていて、手あたり次第に買う。時計。万年筆。ワニ皮のハンドバッグ。バンド。それに、言わずと知れた宝石である。何でも買う。回春の秘薬だというふれ込みの、ゴルフの球ほどもあるまつ黒い丸薬を買って来てくれた奥さんもいた。本屋の「文化堂」の奥さんだが、何であんなものをお土産にくれたのか。まさかわたしに気があるためでもないだろうし、気があったところでこの界限「三デブ」のひとりだともつぱらの評判の奥さんなどまったく願ひ下げにしたいが、秘薬は一向に役に立たなかった。その晩、早速、た

めしにのんでみたが、ことにとりかかるとかまえて眠ってしまった、それもふしぎに気持よく眠って、朝目をさますと、もうトミ子は起きていて、カナエとボンにいつものように口やかましく小言を言っていた。

わたしが車をもたないのは、そんなものをもつのは無駄だと思っからである。もちろん、営業用にはライト・バンが一台、小型トラックが一台あって、その二台を「トンカツの西川」のチェーン三店が順ぐりに使っているのだが、それはあくまで店の仕事のためのものであって、自分でどこかへ出かけるときにはいつでもタクシーである。車を自分で運転して事故でも起したらどうするのか。まずもつて、わたしは殺生はきらいである。殺されるのもいやだが、殺すのもいやなのである。それに、今日、きょうび人命もインフレのおかげで高くなつて、補償もバカにならない。千万円もとられて、その上ローヤにもほうり込まれるというのだから、車を自分で運転している人の顔を見ると、アホウに見えて来て仕方がない。そこへもつて来て、税金も維持費もなかなかたいへんだということではないか。駐車場を探るのがひと仕事ですと車をもっているお人は口をそろえていう。それでいて、彼らは車を手放さうとしないのだから、ふしぎである。ふしぎと言うより、彼らは、やはり、まったくのアホウである。

アホウついでに言うと、世の中には、百キロとか百二十キロとかいうスピードを出してよろこんでいるアホウがいる。あんなに飛ばして何がいいのかと訊くと、気持がスカッとするからだという。「藤木」のバカ息子なんかそんなきいたふうなことをほざいてもわたしはビックともしないが、エイ子までいい年をして言うのである。エイ子は「クロ猫」のママで、このミナミのバーは、たいして美人がいるわけではないが、なんとなく気さくで、キタのバーのように乙にすましたところがない。それで、

気に入って、ときどき行くことにしているのだが、そういう気さくなフンイ気をつくり出しているのはひとえにエイ子の人柄である。年のころはずでに三十も半ば、ご面相もさしていただけないが、いつもニコニコして、気立てはよく、勘定はごまかさない。ただ、このエイ子、自動車を自分で運転するとなると、人が変わる。酒をのむと人格が一変するという人間がいるものだが、彼女はお酒のほうはわたしと互角にウイスキーのみくらべができるぐらいで、人格に影響はない。問題は自動車である。それで、人格がまさしく一変する。

まず、飛ばすのである。自分の車のまえに車が一台でもあると、もう落ちつかない。どんな無理をしてでも追い越そうとする。それにわたしがもうちよつとゆつくり走れやと言うと、みんな、早う走つてはりますのや、ここ高速道路でつせ、下手にスピードゆるめたらかえつて危のうまつせとぶつちやう面で答える。いつもの愛想良さとはうつて変つた感じで、今にも夜叉でも立ちあらわれそうである。なんでもヨーロッパあたりでは、みんな、それぐらいの速度で飛ばす。飛ばさないのは人間でないそのである。ゆつくりと走つたりすると逆に罰金をとられたりする。エイ子はいつでもそんなお説教をするが、わたしが黙っているのは、下手に逆らうと、意地になつて余計スピードをあげるからである。なにしろ、相手は生殺与奪の権をにぎっている。からだごとどこかへもつて行かれるような感じがして、わたしには自由がない。あれはいやである。つくづく、いやである。夜でも、景色が見えへんがなとわたしは言つてやるのだが、こんなまっ暗なのに景色なんかありませんがなとエイ子はとりあわない。しかし、暗いなかでも、景色は、やはり、見えるのである。夜行列車からでも、わたしはときどき窓から外を見るのだが、そんなときでも景色は、やはり、ある。しかし、そんなことを車のなか

でエイ子に言ってみたところで仕方がない。相手は猛り狂っているのである。何に猛り狂っているのか知らないが、わたしが、そんなスピード出して何がいいねん、むしろ、胸がドキドキして来て心臓がわるうなつて来るわと言うと、社長はんはな、幸福やねん、満足してはりますねん、そいでな、スピード出さんでもよろしますねんと奇妙な答を言った。

泊るのは大阪市内の谷九たにきゅうあたりにしていたが、ああいうところの連れ込みホテルは昼間からでも雨戸をしめきつている。わたしは必らず、窓を開ける。窓を開けると高台にあるだけにミナミの夜景が見えるのだが、わたしはそういう下界の眺めが好きで、何見てもはりますねんとエイ子はいつでもふしぎそうに訊き、わたしはそんなときいつでもわざとのようにつつけんどんに答える。何やら心のなかをのぞき込まれたような気がするのである。景色や。夜でもな、景色はあるのや。

谷九あたりの連れ込みホテルに行くと言っても、わたしはエイ子にほれているわけではない。好きは好きだが、ほれた、ほれたと言うにはあまりにも二人とも年をとりすぎているし、エイ子はそんなヨロメキ・ドラマに出て来るような、スラリとして瘦せがたの憂愁夫人のふぜいはない。わたしがエイ子にひかれているとすれば、やはり、気だてであろう。二人で寝そべつて、あれこれ世間話をしていて、それが気にならないのである。

二人が気が合っているのは、もうひとつ、二人とも今やことを行なうにさして熱心でないからかも知れない。四十の中だるみというが、わたしがその中だるみなら、エイ子のほうでも三十の中だるみというのがあるのではないか。ホテルの部屋に入るなり、早速ことを始めるといようなことはたえなくてなく、今では、まず風呂へ入って、それもひとりで入って、肥った大きなからだでザブザブ湯を満

ちあふれさせてから（わたしはそんなゆたかな感じが好きだ。家でそんなことをするとトミ子が必ず文句を言うので連れ込みホテルで思う存分お湯をあふれさせるのだが、エイ子は何にも言わない。もつとも、どれだけお湯をあふれさせたところで割りましの料金をとられるわけではない。いや、とられたところで、わたしが払うのだ）、テレビをつけ、部屋にそなえつけの冷蔵庫のビールをのみ、これはいかにもわたらしい雑然とした取り合わせであると言ってエイ子は笑うのだが、どの連れ込みホテルの冷蔵庫にもビールといっしょにおさまっているアンミツの鐘詰を食べ、これやったらうちの店のアンミツのほうがはるかにうまいなと言う。もつとも、そうは言いながらも、食べているのである。食べ残したことはない。エイ子のほうもエイ子のほうでわたしにつづいて風呂に入り、わたしほどではないがお湯をあふれさせてから上って、テレビ、ビール、アンミツに合流する。これでは何のことはない、トミ子と家でしょっちゅうやっていることと大差はない。実際、家でのように、そのまま何もしないで眠ってしまったこともさいさいであった。ただ何もしないままでホテルを出たことはなかった。朝がた、あわててするのである。その点は家にいるときとちがったが、ただ、そのときでも、宿代を払っているのやないか、せんとソンやないかという気持が働いていなかったとは言えない。お金を払った以上、いつでももととはとりたいたい。

車も買わんと、旅行も行かんと、そんなにがんばって働いてどうしはりますねんと、カナエの明日の遠足の準備をしながら、トミ子がいつになく真面目に言い出したことがあった。近所の人かて、みんな、それぞれに忙しい人でっせ。そやけど、休みになったら車でどこかへ家族連れて出かけるし、外国にも行かはる。そんなふう言い出したトミ子に、そういう連中とわしはちがうんやでとわたし

もまたいつになく力をこめて言った。見そこなわんといて欲しいとも言った。言うなれば、彼らはただ現状に満足している連中なのである。毎日毎日、日銭ひぜにが入って、車を買えて、ゴルフに出かけることができ、香港に行けて、というようなみみつきことである。よろこんでいる幸福な人たちなのである。わしはちがうぞともう一度くり返してやった。わしはそんなケチこあきんどな小商人とちがうねん。そうも言つてやった。

どこがちがいますねん。

トミ子はすぐ訊ね返した。さつきからカナエの洋服に名札を縫いつける作業に没頭していて、その間を発したときにもべつに頭を上げないでいて、それはふつうならいかにもわたしを小バカにした感じの間であつたが、ふしぎにそんな感じはなかつた。まあ、何と言いましようか……わたしはもつた**いぶつた**。

つまり、志のちがいやな。

わたしはさつきからビールを飲んでいたので、また一本、新しい鐘をボコンと音をさせて開いて、鐘にじかに口をつけた。わたしは鐘ビールというのがどういふわけか好きで、うちの買いおきはすべて鐘ビールである。鐘ビールのほうが無駄なところにお金をかけていない気がするのかも知れない。そこは薄利多売のわたしの商売哲学にかなつている。

どんな志ですれんと、わたしの思惑ではトミ子は訊ね返して来るはずであつた。ところが、トミ子はいかかわらず名札つけに余念がない。明日の遠足にリュックサックをもつて来い、リュックサックには名札をつけなさいというのが幼稚園の緊急命令なのである。今の幼稚園はほんとうにうるさい



ことを言うものだ。昔は——いや、わたしは幼稚園なんかへは行かなかつた。行くはずであつたのが、親父が「出版事業」に失敗して、そんな無駄金はつかえぬことになつた。「出版事業」と言つても、たいしたことをもくろんだわけではない。夜店の本屋のたたき売り用の講談本の出版をもくろんだのである。そのまえはわたしのアンミツ屋ではないが汁粉屋、さらにそのまえは区役所のレッキとした吏員で（が小金をため込んで、汁粉屋を始めたのである）、たとえ物は夜店のたたき売り用の本であつても、「出版事業」の経験はかきもくなかつたから、失敗したのは当然である。商売の才は、母親の話やらわたしの見聞やらを総合して考えてみると、まるつきり無かつたようだ。区役所の吏員をチンマリとつづけていればよかつたのである。なまじ「出版事業」なんかに、どうせ誰かにおだてられて、その誰かは甘い汁を吸つたにちがいないが、手を出さねばよかつた。「出版事業」とはいかにも大げさな言い方だが、親父の戦死の公報が入つたあとで家に残された遺品を整理していたら、「貴重品」と自分で書いた古びたハترون紙の袋のなかから履歴書が出て来て、そこに、「昭和×年五月ヨリ同×年一月迄出版事業ニ従事ス」とれいれいしく書かれていたのである。「貴重品」と言つても、何かめぼしいものがその袋のなかに入つていたわけではない。履歴書のほかに満期解約済の保険の証書と戸籍抄本とガス代の集金の領収書のとじたのと、それともうひとつ鼻紙につつんだスルメの脚のようなものがあつて、これ何んやねんと母の眼のまえにつまみ上げながら訊くと、ヘソの緒や、お父さんのな、ヘソの緒やと母は言つた。そういうヘソの緒やら何やらをどうしたのかと言われるかも知れないので念のために言つておくと、きれいさつぱりと焼けてしまった。もちろん、空襲のおかげである。親父もあれで志を抱いたものだろう。そう見てもよろしい。トミ子が、わたしの志のことについて

一向に訊ね返して来ないせいとか、わたしは自然にそんなことを考えていて、それは何やらさびしげな感慨であった。三十で区役所の吏員から転職して汁粉屋を始めて、それはどうやらうまく行ったらしいが（アンミツ屋を始めたときにその親父の「成功」が頭のなかにまるつきり無かつたとはいえない）、それからさらに転身して「出版事業」なんかに手を出したのがまずかつた。それもまた志のなせるわざかも知れないが、ただ、親父の場合、志に附随する才能がなかつた。

まあ、志をもつことはええことやで。

ボーイズ・ビー・アンビシャスとも言うではないかとも言った。三十半ばで、志、いや、大志をもつというのはいへんなことではないか。そのところはよく判つてもらわんと困るな。そんなふうにも言った。具体的に言うなら、今年の末までにトンカツ屋のチェーンをもう一店ふやす。場所は今考えているところだが、今度は郊外の団地に進出する。何とかニュータウンの中心のところにおける。五年ぐらいのあいだに、主だったニュータウンには、どこでも、「うまいで、安いで、ワツハツハツ」の「トンカツの西川」があつて、そこにブタの頭をマン画にした旗がヘンボンとひるがえる。「五カ年計画」いうものがあるねん。ソ連や中国なんかでようやりよることらしいけど、わしはな、これから「五カ年計画」に乗り出すわけや。ゆくゆくは、そんな団地に進出するばかりやない。海外進出も考えられますな。わたしはそう勢こんだ口調で言い、「五カ年計画」のなかには「ミツちゃん」のことも入っていると抜け目なくつけ加えた。トミ子はまえまえからベビー・シヨップをやりたがつていて、その店の名前は、どういいうわけでそうなのか知らないのだが、「ミツちゃん」なのである。トンカツ屋ふぜいの女房ではビー・テー・エーでいばれないと考えたのかも知れないが、トミ子はわたし

の「五カ年計画」にさして動かされたけはいはなかった。あいかわらずうつむいたまま、今度はカナエのスカートの名札つけに余念がなかったが、しばらくして、なにしろ、松下はんになりはるお人ですよつてなと皮肉を言った。いや、皮肉というより、あきらめのことばとも、それはきこえた。やけに静かで、落ちついていたのである。

## 一一

松下はんというのは、言わずと知れた松下ナショナル翁のことで、わたしがその松下はんになりはる人やと言い出したのは、「クロ猫」の常連の司法書士の吉見であった。トミ子はその話をわたしの口から聞いておぼえていたのである。吉見は、わたしのほうは一週に一度ぐらしか顔を出さない客なので、毎夜のごとく立ちあらわれて酔いつぶれている彼にこそ常連ということばがふさわしいが、とにかく、ときどき、「クロ猫」で顔を合わせる仲なのである。彼もエイ子を狙っているという話をチラとホステスのサチ子から耳にしたことがあるが、それがどんなぐあいになっているか、わたしは一向に知らない。興味もないので調べてみたこともないのだが、よしんば吉見が彼女のフォルクスワゲンで深夜の女神を走って京都くんだりまで用事で出かけたとしても、そういうことに今さらかかずりあっているひまはないのである。

吉見によれば、「クロ猫」に来るお歴々のなかで、これはと思う人物はわたしひとりだけで、それで、じつと観察しつづけて来た。その観察の結果は、これは松下はんみたいにならるようなお方やということになったのだが、まず、わたしは福相なのである。ふつくらと円い顔で、こういう顔にはお金

がたまりやすい。もちろん、耳たぶのほうもぬかりなく大きくて、米粒が、二粒、いや、三粒はのる。松下はんを見てみなはれ、あの人のほな、四粒ものる。吉見の話につられて、わたしは自分の耳たぶにざりげなく手をやってみたが、なるほど、大きいことは大きい。吉見のを見てみると、いかにも小さい。あれでは米粒は一粒ものらないだろう。それだけでも勝負はついたものと見えた。

吉見は手相も見てくれた。手相のほうも、金儲けにまちがいないという診断であつた。お金がたまるとなると、心配になつて来るのはまずいのことだが、吉見は、わたしが生命線のことを言い出すまえに、女子おなごはんのほうはどうや見とかないけませんと奇妙に生真面目な顔になつた。どんな英雄偉人であろうと、女子おなごはんのことですくじつた人は世に多いのである。政治家、財界人の人となりを見るのにもつとも機敏にして賢明なる方法はそのご仁じんの姿を見ることがあると言うのである。ここらがエイ子とわたしのことに関するあてこすりかも知れないのだが、それはまことにその通りのことであつて、わたしがうなずくと、吉見は身を乗り出して、それから、少し波乱の気味がありますな。今年ぐらいですな、波乱は。案外早いな、これは。

何をアホなことをぬかしていやがるのかと思つた。しかし、わたしも四十すぎの分別のある男で、ハツハツハツと笑い、つまり、きれいなお子がわが生活史のなかに立ちあらわれるということですよと言つた。

ほんまにきれいなお子ですよな、来てくれはりますのんは。吉見がなおわたしの掌をしきいあげにみつめつづけているので、わたしはつづけた。エイ子エイこみたいなご面相のわるい年増とはちがいますねんやろな。もつと若くてきれいな……そこまでは、わたしは言わなかつたが。言わなくても、

気はこころで、以心伝心、判るにちがいないと思つた。吉見だつて、何もエイ子がとびきりよくて「ク口猫」に通つて来ているわけではない。ほかに相手がいらないからである。ただ、それだけのことである。きれいな子かどうか、そこはよう判りませんけどな。

吉見ははじめてわたしの掌の線のくねり、ねじ曲りから顔を上げて、じらすようにわたしをちよつと見てから、あとは一息に言つた。

ようけ来はることだけはたしかでんな。

ようけ言うて、二人かいな。……三人、四人。

吉見は笑つていた。わたしも笑つた。そんなにようけ女が来るとなると、心配になるのは、お金のことはさりながら、男たるもの、やはり、健康である。まだまだわたしは元気だが、今年、四十一歳の誕生日をむかえたころからめつきり衰えて来たことは事実で、ひそかに糖尿でないかと憂えていた矢先なのである。文化堂の奥さんがくれた回春の秘薬もまるつきり効かなかったではないか。それに、満で四十一歳というのは、数えて言うともましくヤク年なのである。さつきから口に出かかつていた質問をわたしは訊ねた。生命線のほうはどないになつてますねん。なにしろ、いのちあつてのモノダネである。松下はんは長生きして、勲二等というような勲章までもらつたが、わたしはどうなのか。もちろん、わたしは、自分の生命線が人一倍長いことを知っていたのである。でなければ、誰が訊ねるものか。訊ねて、あ、これはえらく短いすな、せいぜいお気をつけてと言われたりしたら、それだけで気落ちがしてその晩ポックリいつたりする。わたしの生命線は長くて、そんなことをだしぬけに言われる気づかいはない。ただ、問題は途中で切れかかつていて、これはまえまえから気

にかかっていた。わたしはそのところを指しながら先まわりして言った。ここらで大病するのんちがうやろか。

病気とはちがうと思いますねん。

吉見はゆつくり言った。

そんなら何ですねん。

吉見が黙っているので、わたしは笑いながら念を押した。

何にもあらしませんのやろ。

何にもあらしませんこともないと思いますねん。

交通事故でつかな。

事故ともちがうようすな。

吉見はあくまで真面目くさっていた。

そんなら、ほんまに何ですねん。

わたしもあくまで笑っていたが、声にいくぶんいらだちが出ていた。それは自分でよく判った。それに、さつきから食べていたシヤマの丸干しの生ま焼けの生まぐさいところがえぐい感じで、気になっていた。ほんまに何ですねん、わたしはくり返していた。おどかさんというエな。そうは言わなかつた。

よう判れしませんのや。さつきから見えますのやけど……

長生きはしますねんやろな。

何やらいやな気持ちになって自分ながらひっこいと思ったが、わたしは自然にそう訊ねていたが、吉見の答は明快であり、それはよろしかった。

長生きしますで。たしかですわ、これは。

そんならよろしいがな。

わたしはうなずき、シシャモをもう一皿注文することにしたが、それほどいつものように欲しいと思つたわけではない。長生きして、金が入つて、松下はんのようになれるいうんやつたら、こら申し分ないですわとわたしはうきうきした声を出したが、シシャモの生ま焼けのえぐい味が舌に残っていたせいか、からだがまるごとうきうきした感じではなかった。声だけが浮いていた。うれしくて力がからだいっぱいになぎぎつているような、何か限りなく心細くてこわいような、そんなどちつかずの気持ちであつた。

二

真相は、そのとき、吉見が少しばかり予言者であつたということだ。わたしは吉見の人相、手相をみる能力などかいても信じていないが、人間、ときとして、神様が乗り移ることもある。司法書士という仕事、あれは、そもそも何をやるものなのか。年中、背中をかがめて何やら書類に書き込んでるのである。六法全書とやらを開いて、ブツブツお題目みたいなことをお客につぶやいてみせるのである。あれで金になるとはいいい商売だが、あんなことをしているから神がかりになるのである。自分でもよく判らぬ奇妙なことを口走るようになるのである。その証拠に、そのつぎ「クロ猫」で会つた

ときにその夜の問答のことを逐一話したら、へエ、そんな失礼なこと言いましたんやろかとキョトンとしていた。松下はんにわたしがなるということが何が失礼なものかとわたしはわたしでまた思ったが、あんさん、手相なんかいつも見てはるのですかと訊くと、そちらのほうはうれしそうに大きくうなずいた。本買うて来て、勉強してますねん。バーで女の子にもてようと思うたら、手相見てやるのが一番ですやろ。今度はな、星占いやろうと思うてますねん。あれ、このごろ、はやってますやろ。吉見はひとりでしゃべった。なかなか、雄弁である。さすがに司法書士のことだけはあると、わたしは感心した。

吉見があるとき少しばかり予言者であつたのではないかと考えたのは、香港からマニラに発つた直後のことであつた。松下はんウンヌンのことはまだまだ未来のことで判らないが、何かしらわが生活に異変が起るのではないかというけは、それをあの見ばえのしない司法書士は感じとつていたにちがいない。わたしがそのことに気がついたのは、香港からマニラにむかうヒコキ、それも、あのデパートのごときジェット機——ジャンボ・ジェット機のなかにおいてであつた。すでにわがからだはデパートの体内深くにおさめ込められていたものだから、首狩り族のドー猛な雄たけびも潮ざいのごとくにしか聞えて来なかつたが（エンジンのとどろきも、それが吐き出す黒煙とともにうしろへ一瞬間のうちに飛び去つて行くのである）、デパートはわたしのからだをおさめたまま（つまり、巨大な棺桶だ。そうではないか）、ゴウツーとかウツーとかそんな叫びをあげて、香港とマニラのあいだに横たわる海の上を飛んでいた。いや、わたしは、こんなデパートが空を飛ぶはずがあるものかと信じて来た男だ。とすると、それは、やはり、デパートが飛んでいるのではなくて、わたしが夢を見てい



るということになるのだろう。第一、わたしの横で、さつきからイビキをかいて眠っている肥った女は、トミ子の姉のキヨ子で、こんな女とわたしがいつしよに旅をするなんていうこと、これはもう夢でなくではならぬ。そうでないと、「トンカツの西川」がおかしくなる。「うまいで、安いで、ワッハッハッ」のスポットがおかしくなる。「五カ年計画」が何やら気が抜けたものになる。空気がもれる。はちぎれたところでフツともれる。

わたしが夢を見ているとしたら、キヨ子も夢を見ている。いや、キヨ子は、もともと、そういう女だ。べつに気がふれていると言っているのではない。女には、どいつもこいつもひとたびあることに気をとられたとなると他のことは一切がっさい忘れてしまうという度しがたい性癖があつて、わたしがそれを責めると、トミ子は、うちのアタマ小さいですやろ、ひとつ入つたらもういつぱいになりますねんと言ふのだが、キヨ子において、その性癖はもつともはなはだしい。根が大まかな女だが、デパートの特売場へ言つて三つで百円という超特価のズロースと引きかえに自分の子供を忘れて来たという経歴の持主だ。さつきも、スチュワードスが運んで来たサンドウィッチを懸命に食べていた。食べているあいだは、わたしが何を言つても、ろくすつ返事をしないでいて、ひたすらに食べる。よほど腹がへつていたにちがいないと思うのだが、それにしても、もう少し上品に食べられないものか。大きなパセリなどパリパリ大きな音をたてて口いっぱいに頬ばる。横の外人が見はしないかと気が気ではなかつたが、そのうち、しずかになつた。やれやれと思つて横を見たら、キヨ子はもう眠つていた。そして、そのうち、イビキだ。

こういうキヨ子だから、トミ子も安心してわたしといっしよに旅に出したのだろう。しかし、いく

らトミ子でも、わたしと彼女が香港から大阪へ帰るヒコーキの代りに、香港からマニラ、いや、そこからさらに南海の涯てに至るジャンボ・ジェット機のデパートに乗り込んだとは夢にも思っていないにちがいない。たしかに夢を見ているのは、わたしで、わたしとキヨ子で、この夢、いつたい、はてしがあるのか、それとも、はてしなくつづく夢であるのか。

そもそのものはじまりからおかしなことになっていた。ことのはじめは、たにきゅう谷九——谷九の連れ込みホテルのフトンの上で、そのとき、相手はもとよりエイ子であつてキヨ子ではなかつた。エイ子からキヨ子にいつ、どこで、どのようにして早変わりしたのか。

フトンの上で、例によつて、わたしはビールと鐘詰のアンミツを飲み、食つていた。風呂から上つたあとのしきりである。エイ子も同じようにしていたが、アンミツの鐘があらかた空になつたところで、今日、昼間、パリへ出かける友達を送りに伊丹の空港に行つて来たとしやべり始めた。三週間の予定で出かけたというのだが、お土産にカルダンのスカーフを買つて来ることになつてゐるのだとか、日本でもこのごろカルダンの品物を売つてゐるがパリにはパリでしか売らないデザインの商品があつてそちらのほうを買つて来てもらつつもりだとか、そんな話をしてゐるうちに、エイ子のその友達というのは、はじめはエイ子の話では高校時代のクラスメートで同じようにバーをしている女友達だということになつてゐたのがどうやら男であるように思われて来た。今さらヤキモチをやく年でもないが、ただ、話にはどこやらアイマイなところがあつて、それが氣にくわれない。わたしが何やらたかぶつた氣持になつて、ヒコーキなんか、あれ、飛ぶんやないんやでと言ひ出したのも、わたしのそうした氣持のあらわれであつたと見てよろしいのではないか。とにかく、わたしは、あんなもん、飛

べへんので、飛んでいるように見えていただけのことやとたてつづけに言った。

何を言い出し始めたのかとエイ子は呆気に取られたような顔でわたしを見た。気がふれたのかと思つたのかも知れない。わたしはわたしで調子に乗って、ビールをアホウのようにビンからじかにラツパ飲みしながら、つまりやな、あんたもそのお友だちいうお人も夢を見てはつたのやな、はてしない夢の世界のどまんなかにはつたというわけやとつづけた。お友達の人、パリなんかに着くはずないな、もう夢からさめて、そやな、もうおうちに帰ってはります、マンションで一杯のんではる。それとも、ヒコーキ、もうどこぞへ落ちよつたんやないか。わたしはそこまで言つてのけて、ヒコーキいうもんはほんまにこわいもんやでとちよつと間を置いてからつけ加えたが、エイ子はさして気を動かしようには見えなかつた。とにかく、落ちたらイチコロやからな。わたしがそう結論して言つても、そうでんな、汽車の事故なんかとちごうて、みんな、死にはりますなと相槌はうつが、たいしてこわがつている様子はない。訊けば、四国の田舎に帰るときは、いつも、ヒコーキに乗るそうである。台風の通りすぎたあとだったが、一度はひどくゆれて、もうおしまいだと思つたときがあつたそうだ。しかし、そのあとでも、ヒコーキに乗っている。乗りつづけている。

ケツタイな話やなとわたしは笑つた。エイ子も笑つた。わたしはさつきから話しながら手をエイ子のハダカの背中にやつて、彼女に言わせると笑いの急所である背骨の中ほどを押していたから（そこは笑いの急所であるゆえに、セックスの急所であるとエイ子は主張する）、余計けたたましく笑つたのだが、まあ、人生、そんなものやないと笑いながらエイ子は言つた。それから、わたしの顔をまっ正面から見すえるようにして見ながら、西川はんかて、ヒコーキこわいこわい言うてはるけど、ほん

まはたいしてこわいと思うていはらへんのちがいますかとつぶやいた。

何言うてんねん、わしはほんまにこわいんやで。

わたしはすぐそれだけことばを返して、そのあとも、子供のときからの高所恐怖症やねん、平行棒  
いうのんが、わしはアカンかつたんやと念を押すようにつけ加えたが、同時に、何もそんなにうろた  
えることもないと考えた。

そやけど……

エイ子はわたしの胸のうちを見すかしたように一瞬の切れ目をおいてから、つまるところ、西川は  
んはお金が惜しいねん、それで、どこへも行きはらへんし、ヒコーキにも乗りはらへんですねんとあ  
とはまったくよどみのない口調でつづけた。それはまったく近所の八百屋で大根をいくら買つていく  
ら払つたと事実を淡々と報告しているようなサラサラとした言い方で、そこに皮肉のかけが少しでも  
あればわたしはたちどころに反発したにちがいないが、そういう言い方ではかえつて波風を起てるこ  
とはできない。第一、そんなふうな、考えようによつては人をバカにしたことを言つてのけてから、  
わたしの胸に頭をこすりつけるようにしてからだごと追つて来て、西川はん、うち、あんた、ほんま  
に好きになつて来ましてん、といつになく甘いことを言つた。

あとでふり返つて考えてみると、あれもエイ子のいくら人がよくてもさすがに水商売の女らしい手  
れん手くだであつたのではないかという気もしないでもないが、どう考えてもエイ子はそこまで悪知  
恵を働かせられるワルではない。とすると、わたしが、そうやで、オレ、ほんまにケチな男やねんで  
とたかぶつた口調で言いながら、そのたかぶりをおしまいまで保持し得ないで、いつのまにか、そん

なら、香港に連れて行ってやるかということになってしまった。人生には、そういう魔がさす瞬間があるものである。そして、そういう運命の転機は、えてして、連れ込みホテルのフトンの上のたあいのない問答のなかで生まれ出て来たりする。それに、あのエイ子のサラサラとよどみのない口調がいけなかった。つまり、わたしも香港、いや、その運命の転機めがけてサラサラと流されて行ってしまったのである。翌朝、連れ込みホテルを二人して出るときには、今度の連休に二日足して、四日ばかりで香港往復することに話はきまっていた。四日のうち一日はマカオで、香港からマカオまでは水中翼船で三時間。マカオと言えば、もちろん、バクチである。サイコロ・バクチにルーレット、トランプ。エイ子のおめあてはルーレットである。映画なんかによく出て来まっしゃる。あれ、ほんまにやっつたろうと思うてますねん。バクチ場でいちばん大きいのはホテル何とかのバクチ場で、ついでに言うと、マカオの料理でおいしいのはハトの丸焼きだ。ポルトガルの料理だというのが、なかなか野蛮な感じがする。

いつ、どこで調べて来たのか、エイ子はむやみとくわしかった。水中翼船のことも彼女が教えてくれたのだが、彼女のわか仕込みの情報によると、中国のことばでは、水中翼船は「飛翼船」というのだという。なんや、これもヒコーキに乗っているみたいでつせ。エイ子はクスクス笑った。ヒコーキより空飛ぶ孫悟空だとわたしは言った。エイ子は、また、何言うてはりますねんという顔でわたしを見た。孫悟空が何なのか判らなかつたにちがいない。

そんなふうなことはバタバタときまつたが、なにしろ、何ごとにも抜け目のないわたしのことだ。その香港行を安くあげる手だてがついていなかつたのなら、いくらエイ子のサラサラに惑わされても

そんなところまで流れて行つたはずはなかった。わたしはたしかに女に甘い男だが、鼻の下を長くしたとたんにすべての計算を忘れはてるだらしない男ではない。まづもつて、わたしはすでに香港行の往復切符を一枚手に入れていた。南大阪ツーリストの営業部長の佐伯がくれたものだが、わたしも、アベノ橋南部商店会の監事として佐伯にかなりサービスしてやつていたから、べつに気まぐれにくれたわけではない。言うなれば、リベートである。それをお金ではなく、切符でくれた。聞くところによると、団体旅行の人員の数をちよつとアンバイすると、タダ切符一枚ぐらいひねり出すのは代理店にとつては何でもないことらしいから、やり手の佐伯のことだ、あちこちの商店会の監事にバラまいていのではないか、わたしの場合で言うなら、去年と今年の慰安旅行（去年はグアムで、今年は香港である。あの回春の秘薬はそのときのオミヤゲだ）を佐伯にうけ負わせたほかに、ほかの商店会の監事諸氏にも佐伯を紹介している。それに、去年の末の歳末大売り出しの福引景品は、一等は東南アジア周遊、二等はグアム行で、切符の手配からホテルの予約のことまで、すべて、佐伯がとりしきつた。今年の末もよろしくお願いしますと、ついこのあいだもやつて来たときに、もつて来たのが、その香港往復の切符だった。

エイ子の切符も割引いてもらうことにした。たつた二割引きだが、それでも引かないよりましである。第一、気持がよろしい。はじめ電話で頼んだときには佐伯は早合点してトミ子の切符だと思つていたらしいが、旅券の申請のためにわたしのといつしよにエイ子の写真やら戸籍抄本を出したところで見ついたらしい、連絡はおうちへせんほうがよろしますやろなど何くわぬ顔で言つた。さすがに慣れたものである。そのあたりののみ込み方の巧みさを見ると、わたしのようなおしのび旅行は世に

数多いらしい。トミ子には、九州に用事で出かけるということにするつもりであった。博多と熊本でな、チェーンやりたいという人が来はつてん。連休使うて土地見て来ようと思うてるねん。わたしはあまりしつこくはならないように気をつけながら、二日に一度ぐらい、その同じセリフをトミ子にあらかじめ言った。

しかし、上手の手から水がもるといふコトワザがある。その通りになってしまった。と言つても、トミ子にまるまるバレてしまったというのではない。エイ子が急に病気になってしまったのである。出血があつて、ガンではないかと医者に駆けつけたら、子宮筋腫で、入院して手術という騒ぎになつた。もちろん、香港くんだりまで出かけられるからではない。

本来なら、そこで旅行をやめてしまつてよかつたのである。ただ、わたし、それなら、いつそのことトミ子を連れて行つてやれと考えた。まずもつて、二割引きの切符、払い戻しが効かないのである。そういうあたりの事情がどうなつていいのか、わたしはその道の人間でないのでよく判らないのだが、実際には二割引きでも切符の額面ではもとのままの金額なので、払い戻しを受ければ二割のお金が儲かることになる。それで払い戻しができなくなつてゐるらしくて、その旨は、佐伯から切符を買うときにダメを押されていた。ただ、名義を変えることはできた。エイ子をトミ子に変えることはできた。変えれば、女房孝行になる。トミ子はどこか旅行に連れて行けと長年のあいだ騒いでいたから、これはいい機会だと思つた。神があたえたもうたチャンスである。

今度はだましておかなければならないのはエイ子のほうである。わたしは病院に出かけ、連休には急に用事ができて来れなくなつたと告げた。九州にチェーンをつくりたいというお人が現われたと

言ったのである。エイ子は、手術のあとが痛むのか、顔をしかめて、ウン、ウンとうなずいた。

ただ、思いもしないことが起るのが、人の世の常である。トミ子に香港行を告げると、彼女は行かないと言う。ここらあたり、あとで考えてみると、トミ子は切符のカラクリにうすうす感づいていたのではないかという気がする。もちろん、ことの真実の全貌を知っていたわけではないだろう。知っていたら、そこでお家騒動になつていたにちがいないから、すべてが判つていたはずはない。ただ、どこか、こいつはあやしいと思つたのではないか。なにしろ、旅行には行かん、ヒコーキなんか乗らんといつも言いつづけて来た人物が、突然、香港にヒコーキに乗つて行こうと言ひ出したのである。これで異変を感じとらなかつたら、そちらのほうがどうかしている。わたしが彼女でも同じことをしただろうが、あげくのはて、行かないと言ひ出した。連休にはカナエとボンを宝塚の遊園地に連れて行く約束をしているからというのである。実家のおばあちゃんが孫の顔を見たいと言つているので、連れて行かねばならないからである。理由はぐずぐずといくらもあつた。聞いているうちに勝手にしやがれ、それならひとりで行つてやるぞと思つた。一枚ぐらい切符を無駄にしても、ぜひともしひとりだ。ただ、幸いなのは、トミ子はサボタージュをしただけで、それ以上この真相をたしかめようとしなかつたことだ。調べて真相が判明したらかえつて大変だと思つたのかも知れない。それに、根がズボラなのである。単純に面倒くさくもあつたのだろう。連休には九州にチェーンの土地を見に行くはずとちがいましたんかとも、トミ子は訊かなかつた。わたしが二日に一度くり返した文句など一向に気にもとめていなかつたと見える。

残つた一枚の切符——二割引き、払い戻し不可能の切符はどうするか。悩んでいたら、引き取り手



が現われた。トミ子の姉のキヨ子である。切符のことでグチャグチャ話をしていたら、たまたま遊びに来ていたキヨ子が、そんなら、それ、うちがもらいまひよとアツサリ言った。香港、行きはるのかと思わず訊ね返すと、行きますねんと言う。誰が行きますねんとつづけてわたしは訊ねていた。うちが行きはりますねんと、またアツサリ答えた。いつしよに行きますねんと訊ねもないのに言った。いったん思い込んだらおしまいだと、わたしはさつきも言ったが、誰が何と言おうと、わたしが言

い、トミ子がい、キヨ子の夫の入りムコの洋服屋の坂田がい、二人の子供が口々に言つても、キヨ子はもうきかない。あげくのはて、まつさきに降参したのが坂田であつた。口をまつたくきいてくれないというのである。あんさんやつたら、まさかマチガイ起しはらしませんやろからなと、いつにないねつとりした奇妙な眼で坂田はわたしの全身をなめまわすように見たが、ゲツソリやつれば坂田を見てみると、同情が先に立つて、あまり腹は立たなかつた。トミ子もときどき口をきかなくなるが、キヨ子はトミ子の比ではない。姉妹はことごとく似ていたが、神がかり、キツネつきのヒステリーの点では、姉がはるかに立ちまさっていた。口をきかなくなると、キヨ子はまさにミコみたに見えて来るそうである。坂田の話だが、さもありませんと思つた。いや、後日、まさしくそうだとあらためて思つた。

あの人やつたら、あんた、まさかマチガイ起しはらしませんやろなと、トミ子も同じことを言つた。ハツハツハツと笑つた。わしがキヨちゃんと起したら、あんたは坂田と起すんやな。笑いながら、わたしは言つた。いやらし。トミ子は言い、クルリと寝返りをうつて背中をむけた。香港に発つ前日の夜のこと、おかげで、わたしはトミ子を抱きそこねたが、べつにそれでさして悲しんだわけではな

い。いつか「すし善」の畑さんが言っていた、全身なめまわしのパンマのことをいつのまにか考えていたのである。香港へ行く以上はその男の、中年男の救世主様に会わなければならない。お助け婆さんからだじゅう、上から下まで、下から上まで、なめまわしてはならない。それでこそ、香港なのである。

もちろん、トミ子も本気でキヨ子とわたしのマチガイを心配していたわけではない。まず、あのご面相である。と言うと、妹のほうも大したことがないということになって、それはまったくその通りなのだが、公平に見て、坂田よりわたしのほうがまだしも幸運であった。それにもうひとつ、トミ子に比べてキヨ子ははるかに肥っていた。キヨ子もトミ子もどちらもキツネつきのヒステリー女だが、キヨ子にキツネがついているとしたら、よほど肥ったキツネなのにちがいない。彼女の肥満ぶりは尋常一様のもではなかった。まず、体重のことを言っておくと、六十五キロ。さして身の丈が高いというのではなかったが、体重のせいか、貫禄ゆたかな大女に見える。わたしも中年肥りに肥っていて、坐ると脂肪がお腹の下あたりにだぶついているのがみごとに感じとられるのだが、彼女の場合、脂肪は全身にエコひいきなしに分布している。首も三重、四重にたるむほど肥っていれば、肩から背中にかけて一面に肉がついている。いや、あれば、やはり、たぶん、脂肪だろう。

男女の間からでは、たいてい、人は正反対のものを好むものらしい。肥つたのは痩せたのが好きになるのだろう。大きなのが小さなのを求める。わたしは痩せた女が好きだが、キヨ子も同じことだろう。キヨ子の夫の坂田は、痩せて、見るからに貧相なチンチクリンの小男であった。うちのお父はん、ほんまにええ人でつせが、キヨ子の口癖である。いつ会っても、キヨ子は同じことを言い、伊丹の空

港から二人で飛び立ったときも、ヒコーキが離陸するとすぐそう言った。

飛び立つと、たちまちすぐキヨ子は眠ってしまった。肥った人間に眠り病が多いというのを聞いたことがあるが、わたしはキヨ子ほど簡単に眠れる人間にお目にかかったことがない。隣りの席の男が、おたくの奥さん、えらい旅なれたお人でんな、ボクなんか、外国はじめてですやろ、胸がドキドキして眠るどころやありませんわと見当ちがいのことを言った。商用でインドまで行くそうで、わたしと同年代の男である。「奥さん」のついでにわたしのことも旅なれた人間だと思ったのかも知れない。インドって、どんなところですよと男はわたしに訊ねるので、牛がいますねんとわたしは知ったかぶりを言ってやった。象もいますねん。トラもいるいうことですわ。わたしはいいかげんな出まかせをまくしたてたが、男は感心したようにうなずき、わたしのまくしたてが一段落すると、よほど気の弱い男なのにちがいない、小声で遠慮がちに、へびはいますやろかと訊ねた。いますでとわたしは即座に言い、口紅つけたのがウヨウヨしてますわ、ひっかかったら、おしまいでつせ、まるごと食われてしまいますがなとつけ加えようとしたが、さすがにそれはやめにした。

「奥さん」が目をさましたのは、食事をスチュワードスが運んで来たときだった。彼女はよく食べたので、これもまた旅なれた人のやることだとさらに隣りの席の男の尊敬を博したことだと思う。べつにあらためて訊ねはしなかったが、チラチラ横眼で「奥さん」を見る男の眼がそんなふうに語っていた。そのあとまた「奥さん」はすぐ眠って、今度目をさましたのは、到着直前のすでに「ベルト着用」のサインが出たときだった。窓という窓に干物の満艦飾をはためかせた飛行場近くの汚ないビルディングを見下しながら、ヒコーキいうものはほんまは飛んでへんのやから、今、下に見えとるのは香

港とちがうかも知れへんで、大阪とちがうかとわたしが言うのと、キヨ子はいつにない真面目くさった顔で黙つてうなずいた。はじめて緊張感をおぼえたようであった。わたしのほうもそんな冗談口を叩いたのはからだかひとりでに小刻みにふるえて来たからで、口がこわばつて思ったようにものが言えない。いよいよ、エイゴを話さなければならぬのである。乗つて行つたのはもちろん日本のヒコークィで、すべて日本語で用を足せていたが、それでも、お茶おのみになりますかと訊ねた日本人のステューワーズにむかつて「イエス」と言つてしまつたのは、かなり気が動テンしていたからだろう。そのときには、幸いにキヨ子は眠つていたし、隣りの席の男は便所に行つていなかった。

ま、とにかく、どこへ着くか判れしませんで。

ヒコークィはぐるぐる汚ない建物、つまり、満艦飾の干物の上をまわつていて、まさしくそんな感じであつた。わたしのことが耳に入ったのかどうか、キヨ子はふり返つてわたしを見て、それから落ちついた声で、お父はん、ここへ寄りはつたんですやろか、と言つた。

坂田はんはこんなところ来てはりませんやろ、あの人、外国行きはつたことないですやろとわたしはすぐことばを返したが、わたしをみつめるキヨ子の眼はすわつていた。

うちの死んだお父はんのことですがな……あんさんのお父はんかて、ここへ寄りはつたんとちがいますか、ナニしはるまえに。

それから奇妙にあらたまつた声でつけ加える。

あんさん、このごろ、死んだお父はんのことなんか考えたことあらしまへんやろ。

……

うちらなア、イジなんですんんで。

イジ？……

戦死しはつた人の子供や。

とたんに「遺児」という漢字が眼に浮かんだ。はじめて着く外国をまえにして、もう二十年以上もたえて耳にしたことがなかった漢字が飛び出て来てわたしは面くらったが、キヨ子はさらに昔なつかしいことばを言った。

日本のために生命を捧げはつた人の子供やで、うちらは。

そのことばを言い終らないうちにドシンと乱暴な音をたてて、ヒコーキは地に着いていて、たしかにそこはもう外国——香港であつた。窓の外に「味乃素」の大きなネオンサインの看板が見えて、あ、着いたなと思つた。とたんに、からだがまた小きざみにふるえて来たが、案ずることはない、武者ぶるいである。日本男児ここにありという心境でなくもない。ことに、わたし、イジ——いや、遺児でないか。外人に負けてはならない。

#### 四

遺児は活躍した。まず難関は税関であつたが、これは何でもイエス、イエスですませた。団体客もいっしよで、団体客について来た旅行代理店の若い男が親切にわたしたち二人の世話まで焼いてくれて大いに助かったが、やはり、すべてやつてくれるというわけにはいかない。イエスというと、相手の税関の役人、女であつたが急にこわい顔になってひつたくるようにしてわたしのカバンをとると、乱暴

な手つきでカバンのなかに手をやったが、ケゲンな顔でわたしを見た。それから、肩を西洋人のようにすくめると、行け、というような身ぶりをした。キヨ子が気をきかせて団体客にかかりきりになっている若い男を呼んで来て、それでことの仔細が判明したのだが、ピストルとかライフルとか、そんなものもっていないでしょうねと女は訊ねていて、答はノウと言うべきであったのにイエスとわたしは言った。それでは、もっているということになるのですと若い男はニヤニヤしながら説明した。日本人によくあるまちがいですよ。日本人は何でもすぐイエス、イエスと言いますからね。何を言うていやがると思つたが、親切に来てくれたのだ、そこはこらえて、すんまへんなどと礼を言つたが、若い男は、日本人でそんなこと訊かれた人ありませんよ、おたく、フィリップンかどこかのギャングの親分に見えたんとちがいますかとまたぞろ失礼なことを言つた。

それからはホテルまで、ホテルさしまわしの車である。と言えば、きこえはよいが、税関を出たところで、ごつた返す人ごみのなかからさつきの日本人の若い男そっくりの中国人の若い男がピョッコリ飛び出して来て、アンタ、西川サンデスネ、と下手な日本語で訊いた。わたしがこういうときはあわててうなずいたりすると足元を見られるととつきに思つて、まあ、そうですがとわざと気のない返事をする、もうそのときには、若い男の手はキヨ子のカバンをつかんでいた。奥サン、サア、行きマシヨ。

キヨ子が泣き出しそうな顔をしてわたしを見たのが忘れられない。キヨ子のことをいとおしいと思つたのは、それが最初である。中年ぶとりに肥つた大女のからだの先端にくっついて顔が意外に可憐に見えた。まるで、七つか八つかの女の子の感じであつた。西川はん、どこへこの人、

連れて行きはりますねん。キヨ子はようやくそれだけしぼり出すようにしてとぎれとぎれに言った。西川はんという呼び方だけ、いつものキヨ子だったが（どういうわけからか、彼女はわたしを姓で呼ぶのである。そうでなければ、あんさんである）、あとはまるで別人であった。すなわち、ことばつきも顔つき同様、可憐な子供になっていた。

ホテルやがな。大阪でな、予約してあつたホテルへ行きますんやが。

わたしはようやく落ちつきを取り戻した声で言つて、カバンをしつかりと胸にかかえなおしながら、あたりをすばやく見まわした。香港は泥棒が多いということなのである。また、下手にカバンをボーイなんかにもたせると、たちまち、たいへんな額だかのチップをよこせということになりかねない。外国では、このチップというやつが難物であるときんぎん聞かされて来た。少なすぎてもいけないが、日本人はチップをやりすぎるといふもつばらの評判なのである。それで、甘く見られるのである。万事にボラれるのである。これはけしからぬことだ。

たいへんな雑沓であつた。これだけの人間がほんとうに出むかえに来ているのか、理解に苦しんだが、税関から人が出て来るたびに、喚声をあげながら手をふつたりするのを見ると、やはり、お目あての人間がいるのかも知れない。おかげで、むやみと暑い。若い男と立ちどまつてそれだけの短かい押し問答をしているあいだにも、汗は遠慮なく顔から首筋から腕から流れた。

ホテルは「東京ホテル」というのであつた。そんな名前がついているのだから日本人が経営しているホテルかと思つたら、そうではなかつた。はじめはたしかに日本人経営のものだつたらしいが、今はそうではない。中国人のものだ。それだけのことも簡単に判つたわけではない、車を自分で運転し

ながら、その若い男、陳がたどたどしい日本語でやつつけるのをあれこれ考えて判つた事実である。日本人、ハジメ、シタネ。オ金ナクナツタネ。中国ノ人ニ売りハツタネ。今、中国ノ人ネ。陳トイウ人ネ。ボクノ名前モ陳ネ。同ジ名前ネ。デモ、社長サンノ陳ハオ金アルネ。ボクハナイネ。そんなぐあいだ。車の両側は、ヒコーキの窓から見下したときに見えたにちがいない汚ない、五、六階建ての建物で、見わたすかぎり見えるのは、つづきにつづくのは窓の干物である。干物の下は、赤、黒、黄さまざまな色の看板で、さらにその下を車が列をつくつて走る。二階建てのバスも列のなかにまじつていて、遠慮会釈なく警笛を鳴らしたりするものだから、むやみとやかましいのである。さすがに中国人の街だと思つた。このやかましさは群をぬいている。こんなところにくらして、よくツンボにならないものだなと、わたしは妙なことに感心した。気のせいか、陳も耳が遠い。それとも、ぐわいのわるいときには聞こえないふりをするのか。わたしが、陳さんの給料いくらですぬんと訊いたときには、ソツポをむいていた。

やがて、ホテル、アソコネ、と陳は言い、どこがあそこなのか見当もつけれないでいるうちに、陳は乱暴にブレーキを踏んで、車は急停車に近いかたちできしみながら止まった。サア、降りマスネ。陳はふりむきもしないでわたしと二人を追い立てるように言つた。無礼なやつだと思つたが、たぶん、チップの催促だろうと思つて、日本からもつて来た百円硬貨をポケットから出して手わたしてやると、現金なものである。アリガトウネ、とはじめてニッコリした。キヨ子もハンドバッグを開けて出しかけたので、こんなやつ、百円でええんやとあわてて小声で言つた。きこえたのかきこえなかつたのか、陳は、わたしを見てニヤリとしながら、西川サンノ奥サン、クレイナ人デスネ、と世にもふ



しぎなことを言った。キヨ子はキヨトンとしていた。陳のお世辞はまるつきりきこえていなかったにちがいない。

大阪から佐伯の南大阪ツーリストを通してした予約では、二室とることになつていたのに、一室しか用意されていない。ほかは今日は全部ふさがつていて、とにかく、一室しかない。それにご主人と奥さんが二つの部屋をとつてべつべつの部屋に寝るなんてことはあり得ないという眼で、フロントの感じのわるい男以下しよぎいなげに横で突つ立つて待つている十四、五歳のボーイに至るまで、わたしを見ていたのである。あるいは、フロントの男は旅券を見て、わたしとキヨ子がおしのびで旅行にやつて来た二人連れだと判断したのかも知れない。わたしには彼の眼つきが気になつたが、そんなこととひるんでみても仕方がない。とどのつまり、キヨ子には何にも説明しなかつたが、イエス、イエスといふことにした。わたしは日本語に中学時代にならつた英語をまじえて話したのである。途中で、それまで姿を消していた陳がまたどこからともなく現われ、トニカク、部屋一ツノハウガ安イヨ、とまつたくあたりまえのことを言った。一晚で、日本円で四千円。ついでのことに、このホテルにはかに日本語のできる人はいるのかと訊くと、陳は、イルヨ、と言つて、そばのボーイを指したが、彼の日本語でした挨拶は、すでに午後三時をすぎているというのに、オハヨウであつた。しかし、とにかく、百円硬貨一枚である。わたしとキヨ子のカバンをもつて部屋にまで来た彼に、わたしはまたポケットから百円硬貨一枚を出してやつた。アリガトウと言つたが、ニコリともしなかつたところを見ると、少なかつたのか。カバン二つでは二百円というのが相場であつたのか。

しかし、そんなことでクヨクヨ案じていてもアホらしい。アア、しんどいな、と言つてわたしは

ベッドの上にそのまま横になったが、キヨ子は何も言わなかった。幸いなことにダブルベッドではなくベッド二つの部屋だったが（キヨ子の肥ったからだと同じベッドに寝なければならぬのではないかとさつきからひそかに案じていたのである）、キヨ子は部屋のなかをもの珍しげに眺めまわしてから、ベッドのそばの椅子に肥ったからだをいかにも大儀そうに落ちつけた。ボーイは窓にとりつけた冷房のスイッチを入れたが、いかにも暑いのである。この狭い部屋にこれからこの肥った女と二人でくらすのだと思うと、気がめいってくるような感じで、わたしは元氣をつけるように、せっかく香港へ来たんやから、うまいもん、今夜せいでい食いまひよやとそなえつけの魔法ビンの水をのみながら大声を出した。冷たい水だと思つてのんだが案外生まぬるくて、その上、へんな味がした。香港で生ま水のならコレラになりませと誰かが言つていたのを思い出したが、もう手おくれである。コレラにでも何にでもなりやがれと思つた。そう思つたら何かヤケくそみたいな元氣が出て来て、アメリカや日本のえらいさんが中国へ行くと、必らず中国のえらいさんが御馳走するというアヒルの丸焼き、あれをぜひと食べてやろうと思つた。

つづきは製品版でお読みください。